

文化の涵養地としての高崎を再考する —ブルーノ・タウトをめぐる3つの差別を紐解きながら—

Rethinking Takasaki as a Cradle of Culture:
Unravelling the Three Discriminations Surrounding Bruno Taut

齊藤理*
SAITO Tadashi

Abstract :

The world-renowned modern architect Bruno Taut (1880-1938) resided in Japan during the 1930s due to Nazi persecution. For a significant period, the people of Takasaki provided him with shelter and refuge.

The present study focuses on Takasaki, the city that welcomed Taut, and re-examines the reasons why this city was able to pursue policies centered on culture while sometimes resisting the wishes of the government of the time. In addition, it explores the necessary measures for the protection of such an intellectual figure.

In doing so, the author elucidated the reality of the three structures of discrimination that Taut confronted, and which had an impact on his life. Furthermore, the author analyzed how Taut managed to overcome this discrimination.

Specifically, the third theme, which focused on bamboo crafts and discriminated communities, highlighted the potential for a global exchange of knowledge regarding discrimination.

In conclusion, the following factors may be considered:

- a) Takasaki was a city that was well-equipped to welcome cultural figures, and had a personal network that could actually handle the invitation, such as Taut's patron, Fusaichiro Inoue.
- b) Taut, although initially unwilling, used "crafts" as a cultural catalyst, and built a solid relationship of trust with Takasaki's artisans, and furthermore, exhibited his works at the "Miratiss" store, making the results visible and easy to understand for everyone.
- c) Takasaki's rich cultural and natural environment and the genuine warmth of its residents.

These factors interacted with each other, freeing Taut from the oppressive feelings of discrimination and helping to shape Takasaki into a more clearly cultural city.

キーワード：高崎、ブルーノ・タウト、井上房一郎、工芸、竹細工

Keywords: Takasaki, Bruno Taut, Fusaichiro Inoue, crafts, bamboo work

* 山口県立大学国際文化学部教授 Prof., Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University, Dr. Eng.

1: 研究目的・方法

20世紀初頭、建築の近代化の一翼を担った著名な建築家ブルーノ・タウト（1880-1938）は、1933年5月、時の為政者ヒトラーに国を追われる形で来日し、その後、1936年10月に大学教授としてイスタンブールへ招聘されるまでの3年半を日本で暮らし、仙台、高崎、東京、京都などを拠点に講演や、工芸指導に当たった。タウトは日本滞在中、不遇にも建築設計の機会に恵まれず、「建築家の休日」と自嘲していたが、それに反比例するかのようむしろ執筆活動は旺盛になり、幾度も版を重ねた『ニッポン』（1934）を皮切りに、内容をより高度にした『日本文化私観』（1936）、住居をめぐる習慣などをつぶさに書き留めた『日本の家屋と生活』（英語版1937、邦訳1966）、『日本美の再発見』（1938）など、この時期に名著が次々と生み出されていった。これらの文献が、広く世界に向けて日本の美意識を発信し、また同時に国内に向けても日本人の自文化に対する再認識を促したことはよく知られている。

本論では、そうした、タウトを視軸に置く従来の歴史学や作家論上の調査法ではなく、高崎という、2年半にも互りタウトを庇護し続けた都市の側の視点に立って、文化を守り育てる、いわば「文化の涵養地」として機能していた当時の動向を再照射してみたい。その際、タウトが直面した種々の構造的な差別の実態に着目し、これらをどのように克服しようとしていたのか、間文化的な視点から分析を深めたい。構造的な、と記したのは、個々人の偶発的な差別のあり様ではなく、差別の感情が連鎖し合っ、個人では抗しがたい「構造的な差別が形成されてしまっている様」、すなわち「差別の構造」に目を向けたいと考えているからである。この目的のため、本論では、昭和初期における、日記、新聞、雑誌、会報誌、回想録等の文献資料を主な素材としながら、異なる立場に置かれた人々の認識のズレ、誤認などを再検証しつつ、上のことがらを解明していく。

2: タウトに先行する井上房一郎の工芸運動

タウトはなぜ故国ドイツを追われたのか。タウトは、1932年4月からモスクワに招かれて10か月間、同地にて働いている。労働者の視点に立ったソビエト社会主義にも共鳴するところがあり、スターリンとも直接、握手をしたほどである。一方、ナチスの反ユダヤ主義に反対する立場を隠そうとはしなかった。

タウトとともに日本へと逃避したエリカ夫人の回想にも「ナチスが大学からユダヤ人教授を追放した時、それまでは親しい友人として交際していたのに急に挨拶もしなくなる者が多かった。私の夫はそんな卑劣を許せない人であった。平気で夕食に招いたり訪問したり、むしろ必要のない好意さえ示した」とある。自らの保身ではなく、些細な差別の萌芽に敏感になり、差別を排除しようと果敢に行動する人物であることが、この逸話から伝わってくる。しかもこれはタウトの個人的な信条に留まる話ではない。社会改革を唱える建築家として、市民が支え合い、共同して豊かに暮らすことができる大規模な団地計画をドイツにて実際に担っていた建築家の立場から、翻すことのできない学術的理念の根幹でもあったといえる。

本論にて触れる一つ目の「差別の構造」はこのナチスによる、良識ある文化人の迫害である。モスクワからベルリンに帰国後、ナチス系の新聞に、タウトは反ナチス的であると書かれてしまい、身柄を拘束される寸でのところで、1933年3月1日、タウトはベルリンを脱出した。承服できない「差別の構造」が影響し、むしろ消極的選択ではあったものの、タウトは愛する家族を残し、青年時代から憧れていた日本を目指すことになったのである。この迫害から、何らかの形で被差別者を庇護する必要があるが、その役を日本において果たした代表格が、高崎という都市であった。

その頃、高崎では井上房一郎（1898-1993）ⁱⁱによる工芸運動が花開こうとしていた。氏は、高崎の有名企業である井上工業を築いた井上保三郎の長男であり、実業家として活躍した。学生時代に日本画家・川合玉堂、詩人・北原白秋ら文化人より直接的な刺激を受け、1923年、画家になろうとパリに渡る。すでに渡欧前にも、高崎を中心に文化運動、社会運動に情熱を傾け、思想家・吉野作造や政治学者・大山郁夫を招いた講演会を主催したりしていた。

なかでも、農民美術運動や自由画運動の推進者として知られた画家・版画家・山本鼎（1882-1946）に強い影響を受けるとともに、井上は山本の世話で憧れの渡仏を果たしてもいる。山本鼎は、美術の大衆化、民衆芸術運動に尽力した人物だが、とりわけフランス留学ならびにモスクワ滞在中、素朴な農民美術運動に感銘を受ける。山本が範としていたのは文豪・トルストイが始めた農民学校である。農民が農閑期に工芸品を作ることで副収入を得ることができ、さらに美術的な仕事を通して、農民の文化への意識を高めようとする仕組みであり、後に日本においても実行しようとした

スタイルであった。このポリシーは井上にも深く影響し、後に井上によって高崎でも部分的に実現している。その源流はここにあった。

さて、井上のフランス留学は1929年までの8年間にも及び、文化・芸術による社会変革について見聞を深めることになるⁱⁱⁱ。とくに画家・セザンヌに傾倒していたといい、セザンヌによる「感覚の実現（réalisation）」をはじめ、主観によって自己と外界との関係を究める手法に感激し、それを絵画のみならず、彫刻や建築、すべての造形芸術、ひいては社会を構成する多様な関係性においても適用し得る可能性について、大いに期待を寄せていたという。「セザンヌと出会い、セザンヌに学ぶことで、私は自己を確立し、外界を観察し、社会的創造をなすことに勇気をもつようになった。そして、こうした考えは、私の将来の活動の方向性を決定した^{iv}」と回想している。井上は、後にタウトを援助したのみならず、絵画、音楽等、様々な領域を横断的にとらえ、文化支援に惜しみなく当たったが、その広い視座に立った思想の背景には、民主的で文化的な社会運動に直に触れた青年時代の経験があった。

フランスから帰国後、井上は「高崎市を中心にした諸々の文化現象に対して清新な雰囲気を醸成することを目的」に、当時の高崎市長らをも巻き込んで「新生会」を設立し、運動の母体とする。他ならぬ郷里の高崎を文化都市にすべく、遊学の成果をすべてこの街に注ぎ込もうとしていたのである。井上は「数年居った仏蘭西から帰って疲れた高崎の姿を見たから、之を数字的に研究したい」とし、都市と農村の関係性、高崎が果たし得る産業振興、こうした点に関心がある旨、表明している。

ところで、タウトが高崎を訪れるのは、それから数年経った1934年のことだから、それ以前の高崎にはすでに井上の熱き想いと無類の行動力によって、いわば「文化の涵養地」としての基盤が築かれつつあった、ということが指摘できる。

従前のように、タウトを中心として史実が編まれるとき、タウトの秀でた才ばかりが焦点化され、当時の高崎が本来的に有していた文化的な特異性は影を潜めてしまう。だが、そもそもこの街に、市井の知を集積させながら文化都市を築いていこうとする、井上らの熱い運動が芽生えていたからこそ、タウトが高崎に居留することに同意した、と捉える方が適当である。

本論にて、この点を再検証することによって、各都市／地域のローカリティが、グローバルな領域とどのように直接的に関連し得るのか。また、都市の次元で文化人を庇護する上で求められるのはどのようなことなのか、示唆を得るものとする。

こうした点を視野に入れつつ、タウトを高崎の地に受け入れる、ということが、実際にどのような過程を経て実現し、タウトの美的観念と井上らの抱く文化振興の方向性がどのように融合されたのかを具に見ていくこととしたい。

井上に出会う前のタウトの動きはこうだ。商工省によって1928年に設立された国立仙台工芸指導所において指導に当たっていた。この指導所は、世界の趨勢に比し日本の工芸が機能面、デザイン面、製造面等においてかなり遅れをとっていることに危機感を覚え国主導で生まれたもので、工芸品の質を向上させ、輸出を盛んにするという大方針があった。

しかし、この仙台へのタウト招聘には紆余曲折があった。この経緯を振り返ることは、のちの高崎への招聘過程と比較する上で有意義なので、少ししたためよう。

ことは、1933年9月1日から5日まで、日本橋三越本店4階で開催された「商工省工芸指導所研究試作品展覧会」をタウトが訪問したことに始まる。9月4日、建築家の久米権九郎（1895-1965）、蔵田周忠とともに会場を訪れている。ひとしきり観終わったあと、仙台工芸指導所所長の国井富太郎が、出展品についてタウトに批評を求めたところ、驚くことに「良い物は何一つない」とこっぴどくこき下ろされたという。そこで国井は、後日、久米を介し、「工芸試験所に来て所員を指導して貰いたい」とタウトに申し出た。タウトは、「あれ程酷評をしたのになぜ私を招聘するのか」と切り返したというから、余程、辛辣な批評をしたという意識があったのだろう。

結果的にタウトは仙台にて指導することに応じたが、実はことはスムーズに運ばず、「外国人を指導所の囑託にすることは前例がないと云うことで商工省及外務省に諒解を求めるに苦心した^v」という。履歴書を提出するだけでは済まず、その人と成りの証明、建築家ではあるが工芸界にとって必要な高い教養をもつ批評家であることを繰り返し説明することを求められたという。さらに、資金面でも難があって、指導所には顧問受け入れの予算がなかったため、商工省貿易局にすがり、工芸品の輸出振興費を当てることでようやくタ

ウト招聘が叶った。^{vi} 国井の強い熱意があつて、なんとか招聘にこぎ着けたのだが、この一件を通し、私たちはタウトが直面した2つ目の「差別の構造」を確認することができるだろう。

ヒトラーから逃れてきた「要注意人物」であるドイツ人を、当時のわが国は、公式には決して歓迎していなかったのである。これに関して、仙台時代の弟子で、後にデザイナーとして活躍する剣持勇は、後年、「先生、ごめんなさい」という、少し胸を衝かれるようなタイトルの小文を寄せている。仙台での一件は、それほどまでに周囲には不可解な事態だったのだろう。それは、こんな具合に回想されている。工芸指導所の幹部を指し、「当時の日本のお役所であるからには個人の好意ではいかんともしがたい圧力があり、忠良な官吏は誰でも危い橋（赤いと見られること）に近よりたがらなかった^{vii}」という。むろん、タウトはこの種の「圧力」や、じつは何も変えたくない幹部たちの内心を明に暗にと感じ取って、怒りの感情を隠さないこともあった。同指導所では、例えば、ドイツの近代家具の図書にあった椅子の図面をそのまま無断使用し模作したりと、啞然とするような仕事がなされていたのだが、タウトは「この椅子にみえる椅子ならざるもの！こんなものを作る仕事はすぐに止めるべきだ！」と一喝し、当の椅子を持ち上げたと思ったら、思いつき床に叩きつけた。それほどまでに、抗しがたい無理解と息苦しい雰囲気支配されていたのである。

結局、仙台においては、工芸品の設計>試作>評価>再び試作へ、という既にドイツ工作連盟において実践されていた合理的な制作プログラムを定着させることが叶わず、深い失望のなか、タウトは仙台での役務を辞することになる。

1934年3月7日、仙台を離れたタウトは、ロシア人画家で友人のブブノフを頼って東京・大久保に一時、投宿し、その後、1934年4月上旬、京都の実業家・下村正太郎のところに落ち着く。この間、2度目の桂離宮訪問を果たしたり、小堀遠州の墓参りをしたりといった当て所のない日々を過ごす。その後、5月15日に東京に戻るが、生活の糧を見つけるためにと、渋谷の国際フレンド会館に逗留しながら、久米の紹介で川崎の大倉陶園の顧問という任に就く。

高崎との関わりが生まれるのはこの頃である。5月24日、インターナショナル建築会のメンバーである久米権九郎が井上房一郎を銀座の料亭に呼び出し、タウトの受け入れについて相談する。後の井上の証言

によると、そもそもは、五島慶太を介してこの話がつながったという。久米の姉が五島の妻であり、五島が、井上の義兄に当たる内務省警護局長・唐沢俊樹と知り合いだったことによって、タウトを支える人的ネットワークが形成された。とりわけ、五島と唐沢の親しい関係がタウトにとっては功を奏した。五島が東急コンツェルンを築き上げるに際し唐沢がかなり協力し、逆に唐沢のために五島が家を建ててやったりする関係だったという。先の仙台への招聘とは異なり、当時、内務省の幹部だった唐沢が後ろ盾になったことで、「ナチスに追われた要注意人物」であったタウトの受け入れが叶った。タウトは、日常的に警察に監視されてはいたが、このような背景から連行されるようなことはなかった。

井上の回想録によると、久米の言いぶりはこうだった。「君はよく知らないかも知れないが、ブルーノ・タウトという偉いドイツの建築家が日本に来ている。ただ、どうもヒトラーとは馬が合わない。帰れないのだ。工芸家としても世界的に有名だ。今、君がしている仕事に役に立つはずだ」と久米から言われたという。兄貴分の久米に頼まれて断ることもままならず、困惑しながらもタウトを受け入れることになった。さらに久米からは注文がついて、「タウトさんは偉い人でプライドも高い。あくまでもお招きする形だ。それも、君個人ではなくて、県などがお招きする形がよい」と。この玉虫色のやり取りの内容は非常に重要で、久米が気を回したことに起因し、「井上がタウトに依頼して高崎に来てもらった」という実際とは異なる認識が広まり、もちろんタウト自身もそのように認識していたがゆえに、様々なボタンの掛け違いが生じることになる。タウトは高崎での待遇の不満を井上につけ、井上は板挟みとなって苦しむことになる。

3: 「工芸」を媒介として形成されるタウト—高崎の繋がり

果たして、タウトは1934年8月1日、上野駅を発ち、「井上の依頼によって」工芸指導に当たるため高崎へと向かうことになった。居所として準備されたのは、高崎近郊（当時は八幡村）の山ふところ、少林山・達磨寺にある山荘「洗心亭」であった。この庵は、そもそも同地の地主・沼賀博介が、農業の改良事業のため東京農大の教授が仮住まいできるように、と設えた六畳と四畳半だけの平屋であった。ゆえに、井上も取り敢えずは「100日間だけ貸してほしい」と住職に頼ん

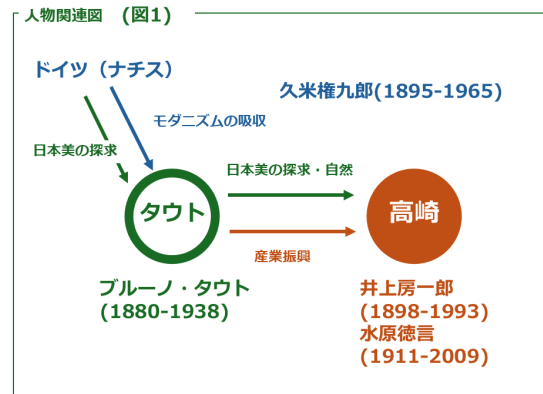
でいたようだ。それほど簡素な造りであった。^{ix}

同地に足を踏み入れたタウトはしかし、簡素の極みには気づきつつも、むしろそこに日本文化の特質を見出し、眼下に広がる自然の風景を喜んだようだ。その日記では、「洗心亭はささやかな小屋であるが、部屋からの眺めは実に素晴らしい。洗心亭に着いた当日は、途端にこの美しい風光にすっかり心を奪われて、慣れぬ田舎住いをこれからどう暮らしたらよいものかなどという思案をまるきり忘れてしまう位だった」と、絶賛している。

この少林山を拠点として、タウトの工芸指導はさまざま精力的に進められたが、井上工房のスタッフらへの指導は、当初はかなり苦勞したようだ。やはり、仙台で経験した苦勞が再燃することになる。ときの行政による工芸振興策が、輸出拡大などの経済利益を優先して組み立てられていたことから、事程左様に高崎においても、地域性や真正性を重んじるよりは、先ずは「売れるもの」を目指していたのが実態である。売れ行きが見込めれば、模作ですら躊躇なく行われたという。他ならぬ井上自身も、自ら発案した「角型シガー入れ」（1934年）においては、その4年前にピカソが描いたデッサンと瓜二つの意匠を提案していた程である。ほかにも井上自身のデザインした作品として、「鑄物小卓」（1932）、「スチール椅子と机」（1932）などが代表作に数えられるが、キュビズムの影響が明らかで、総じて、「それらしいものを模倣する文化」が蔓延していたことが伺える。この点、タウトの造形論との大きな乖離があったのだ。

そこで今一度、タウトが高崎に赴任する以前の工芸の状況を確認しておきたい。井上房一郎は、フランスから帰国し、高崎での諸工芸の生産体制を利用しながら、新しい家具、テキスタイル、漆工など、幅広くデザインを刷新しようと尽力した。その掛け声は多方面に拡がり、賛同も多く集まった。バウハウスを模範とした建築工芸研究所を主宰する川喜田煉七郎、バウハウスに実際に留学していたテキスタイルデザイナーの山脇道子も高崎を訪れ、制作に当たっている。ことに、前者の川喜田は、自ら創刊した月刊誌「建築工芸アイシーオール」に、井上らの活動を指し、アイシーオール高崎分場と勝手に掲載してしまうほど、高崎での動きに共感していた。

ただ、当時、房一郎がデザインを手掛けたといわれる井上工業本社（高崎市）の建物を見ても、白い箱状で、採光量を考慮した大きな連続窓を有したモダニズムの外形をしている。



つまり、タウトが来日する前、井上が描いていた近代デザインのイメージは、いわゆるバウハウスのモダンスタイルそのものであったことが分かる。タウトに期待することも、(図1)に示すようにモダニズム・スタイルの伝授であった。白い壁で、直方体の外観をしたバウハウス風の建物を、しかし、中身は木骨構造で普及させようとする、いわば張りぼてのようなトロッケンバウ研究会に井上も名を連ねている。1932年12月に、川喜田らが率いる銀座の新建築工芸研究所で開催された「日本トロッケンバウ研究会 第一回講習会」において、市浦健、土浦亀城、蔵田周忠ら著名な建築家たちとともに、井上房一郎も「トロッケンバウの経験」と題し講演しているほどであった。これらの記述から、井上の提唱する高崎を文化都市に、との理念の大枠はタウトも共感できる話であったが、具体的なデザインの方向性、美的な感覚等には当初からかなり開きがあり、両者が美的な一致点を探りながら工芸品を創り出していこうとなると、自ずと制作の現場に負担がかかっていたようだ。

1934年8月上旬のタウトの日記を紐解くと、俣田郁彦、磯村卓郎、原田一夫、真井邦雄ら若手の助手が洗心亭に集い、工芸品の設計指導を始めたことが記されている。タウトは猛烈な勢いで漆器、木工品などの新製品のアイデアを描いていく。電気スタンドや椅子、腕環、腕飾、ナブキンリング、ベルト、皿、壺の装飾用替コルクなど、相当に幅広い。これらを製図する作業を通して、タウトは若手らに設計プロセスを丹念に教え込んでいったのだ。

1934年10月29日になると、日記にはタウトの達成感が表面化してくる。「高崎の工場では、私の仕事の成果が目に見えてはっきりした形を成してきた。…日独合同の作品が今まさにできようとしているのである。これは日本の工芸における新しい「光点」ともいうべきものだ」と。

一方で、この年の12月になると、タウトは日記のな

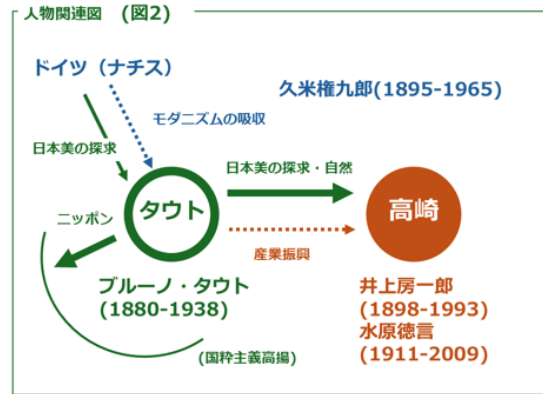
かで資金不足を再三指摘するようになり、1935年1月2日の日記に至っては、井上に対する辛辣な言葉が並んでいる。「私は井上氏の口車にまんまと乗せられたという嫌悪感を禁じ得ない。…約束した金額の半分しか支払わないのである。何もかも地方商人の狭い遣口だ」と。この件については、井上側に他意があるわけではなく、両者が最初に出会った際の行き違い、すなわち、高崎において庇護する／高崎から招待を受けた、という双方の思惑の相違が、折々に噴出してしまったのである。ここに、文化人を庇護することが、単に同情や信念だけでは持続できない、という重要な点に私たちは気づかされるのである。

こうした事態は、少し予想外のところから転換点を迎えることになる。この頃から、タウトが自ら著した日本文化を賞賛する論説が評価されていくのである。ことに『ニッポン』は、1934年5月に初版が刊行され、その年の10月には第2刷、翌35年6月に第3刷、36年7月に第4刷と再版が続き、1943年12月の第16版までヒットタイトルとなって多くの読者に受け入れられた。^{xvi} 国粹主義高揚の書とも言われるように、戦時下のベストセラーになり、広くタウトの名を世に知らしめることになったのである。

1935年5月22日の東京朝日新聞に掲載された蔵田周忠による書評では、桂離宮・法隆寺・民家・能面等の写真と解説が解りやすく、「世界の隅々にまで行き渡らせたい」ほどの内容であり、「政府筋が多大の便宜と援助とを『ニッポン』の上に提供されるのを期待したい」と高く評価している。同様の声は少なくなく、例えば「国際文化振興会事業報告書 昭和10年度」を開くと、国際文化振興会からも高い評価を得ており、「日本文化研究外国人に対する奨励と補助」の対象にタウトが選ばれ、ドイツでの業績の他、「1933年来朝。日本建築を研究し、邦語訳の印象記『ニッポン』を出版した」と紹介されている。^{xvii}

外国人であることを理由に諸所の要職に就けず、また建築家としての、あるいは大学教授としての仕事が受けられず、だからといって、ドイツに戻ることもままならないという、二重の「差別の構造」の板挟みの状態にあったタウトは、しかし文化を愛で、その本質を理解しながら工芸品として体現化することを通し、自身の日本での滞在継続の途を開いていくことになる。一方で、井上ら受け入れ側の「高崎においてモダニズムを取り入れた産業振興を」との思惑からはややずれていくことになる(図2)。タウトの関心の先は、高

崎だけにとどまらない日本文化全般に向けられていたのである。この事態を変えたのが、高崎というエリアを飛び出して、銀座で工芸品を売る、という発想である。



4: 「ミラテス」という一つの解

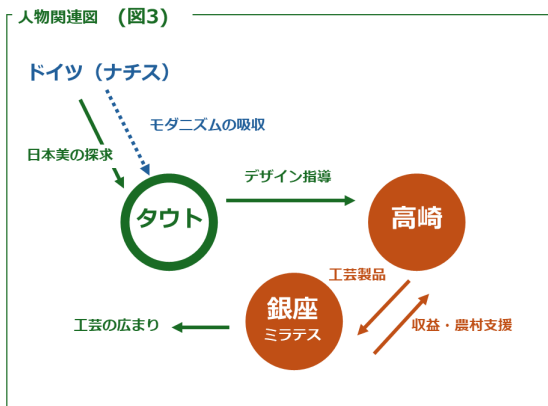
井上は、自ら手掛けた工芸品を販売するアンテナショップの開設を思い立つ。1号店は、外国人が多く滞在する軽井沢で、旧道の中心商店街、救世軍と野々宮写真館に挟まれた位置に1933年8月にオープンした。店名は「ミラテス (Miratiss)」とあって、「裂地を讃える」という意味がある。実際に、大使館に勤務する外国人や生活にゆとりのある層に好評だったという。朝7時から夜11時まで開店させたというから注目を浴びていた様子がうかがえる。

その後、1934年の暮れには、華やかな銀座に建つ瀧山ビルの1階、路面店にてミラテス (銀座) をオープンさせた。翌年の東京朝日新聞1935年1月21日付朝刊には、「銀座に新彩 商人になった独の芸術家」などと高らかに紹介されている。この店も注目を集めたようで、朝7時から夜9時まで開店させ、店員は店に寝泊まりするほど多忙だったという。

時の日独合作映画「新しき土」で主演を務めた原節子がドイツへ旅発つに当たって、ミラテスの銘仙でワンピースを仕立てたとか、やはりスター女優のひとり水戸光子がミラテスのピンク地水玉模様銘仙を着て『映画の友』の表紙を飾ったなどの話題性に事欠かなかったようだ。

このミラテスにて、竹のスタンドを購入した者のなかに、後にタウトの重要なクライアントになった人物がいる。実業家・日向利兵衛であり、竹を巧みに用いた意匠性を気に入って、この人ならば、と自らの別荘建物の設計を依頼することになるのである。この別荘建築についての詳細は別稿に譲るが、ミラテスは、経

営上はさほど利益も上がらず苦しかったというが、タウトや井上の活動を広く世に問う契機づくりとしては極めて有益だった。後に近代建築の巨匠、とまで評される丹下健三もミラテスの愛好者の一人だったことはよく知られるが、ミラテスはわが国のデザイン界を刺激し、新たな発想の源を提供していたという点、それから、工芸品の作り手たちにとっても、民芸運動とはまた異なる形で工芸文化と実社会との接点を創り出すことができたという点、おもにこの2点の意義が指摘できるだろう（図3）。以下、とりわけ後者について注目してみたい。



5: 竹細工をめぐる露呈する「差別の構造」

本論の最後に取り上げたいテーマは「タウトと竹」の関係である。タウトが熱海にて設計した日向別邸にて竹材が内装に多用されていることから、タウトが竹を好んでいたことは広く知られている。竹が多用されていたことは、こと工芸品においてもより顕著であり、多くの関係者がそれを裏付ける証言を遺している。

例えば浦野芳雄は、タウトが竹を非常好んでいたことをタウトの言説を交えながら明確に証言している。タウトは、「『竹』と云っては、それによる新しい考案を続けた」という。少林山の講堂にて、タウトが竹を素材に新しい工芸品の図案を考え、それを俣田らが詳細図に起こし、群馬県工業試験場高崎分場や木工組合で試作しよう、という段取りだった。ただ、俣田ら助手役の学生たちにとっては、竹を用いることの意味がよく解らず、竹という厄介な自然素材を扱う手間に大分参っていたようで、助手たちの間では、陰でこんなやり取りがあったそう^{xviii}だ。

「又竹だってさ」

「彼方には竹がないでせう。それがここへ来たら、どっさりあるので、すっかり竹が気に入って了ったら

しいのですよ」

「竹なんかがいいのかねえ」

「馬鹿に竹が気に入ってるのですね」

「竹が馬鹿に気に入ったと見えて、何にでも竹を使ひたがるさうです」

日本人にとっては、竹は余りにも身近過ぎる上、竹を素材にした製品といえば例えば竹ぼうきのような廉価品であって、タウトがこの素朴すぎる素材になにやら過分な評価を与え、付加価値の高い「工芸作品」に仕上げようと尽力している姿を容易に理解することはできなかったのである。しかし、浦野は、タウトが竹を評価したのは、物珍しかったわけではなく、その柔軟で自由な曲線を出せる性質を持ちながらも、一方できわめて強靱な性質、これらを同時に備えていたからであったと指摘する。

タウトは、とくに水原徳言とともに、竹皮編みの技法を用いて竹の工芸品を新たに開発しようと試行錯誤を繰り返した。それは、ドイツで植物の韌皮を用いて作られていた籠をモデルとしたもので、その作品が掲載されているドイツにおける工芸新商品を紹介する雑誌「Die Schaulade」を取り寄せたり、実物の見本を、商工省を経由して借りて、編みほぐしたりして研究した^{xix}。ただ、それだけではどのように生産するか見当がつかなかったため、地域で下駄表を作っている組合の会長・山本一郎の下を、見本を携えて訪れ、知恵を乞うたという。具体的には腕利きの職人・中原泰護の協力の下、盛籠、スリッパ、ハンドバックなどの製品化が実現した。当初は、タウトらが、中原の工房を訪ねる様子を、周囲はただ好奇の目で見ていたというが、タウトの熱意にほだされてようやく事が動き始めたのだという。

このような努力が実り、タウトによる工芸品創作の活動は、タウトが意図したように日本の農村社会の生活改善と関連づけられながらその意義が認識されていく。

東京朝日新聞の1936年2月18日の朝刊には、「新時代への息を吹込んだ郷土工芸」との見出しが躍り、次いで「タウト氏等の指導結実して婦人の内職も増加」とある。「木工、竹工、漆芸、染色、織物等の工芸品を作っていたものの、その内容は極めて幼稚だったが」、「ドイツの建築家ブルノウ・タウト氏に委嘱し、協力して郷土工芸品の改良改善につとめた結果、同地方の製作品の内容は全然一変すると共に家庭副業にも新しい道が開拓されるに至った」。さらに、高崎の木

工製作組合の例だと、当初は年間1,500円程度の生産額が、目下、17,000円にまで拡大していることが報じられている。大きな成果である。

さて、この新聞記事には明確に示されていないが、当時、竹工芸というジャンルが、他の漆や陶磁器などに比べ格下に見られていたり、竹細工に携わる職人たちが不当な差別を受けていたことにも触れておく必要がある。

群馬県の部落解放運動を振り返る資料には、タウトが高崎に滞在中、「南部表」といわれる雪駄表作りの職人と出会い、その精緻な技術と美しさに感嘆したことが記されている。その後、竹皮という地域素材と、職人たちの伝統的技術、それにタウトのデザイン性が相まって、新たにブランド化する道が拓かれたと指摘している。

そもそも高崎周辺での竹皮編みは、江戸時代から被差別部落の産業として知られていた。昭和初期、家族総出で早朝から夜9時、10時まで座り通しの作業に当たって日に50銭から60銭程度の稼ぎになったという。とくに一帯は「高崎表」の質の良さから評価が高かったといい、とくに高崎の倉賀野には有能な職人が居て、タウトが高崎を訪れる数年前の1929年、「第1回下駄表編み品評会」で五等に入賞するほどだったと記録されている。

タウトもこのような職人の働く現場を直に訪れている。その様子は、やはり常に傍にいた水原が目撃し、藤森照信によるインタビューで次のように証言している。タウトと共に竹細工職人を訪ねた時、彼らの家の造りが粗末なことに気づいてどうしてかと尋ねるので、理由を説明すると、「『ユダヤ人のような境遇なんだね。それなら助けなければならない』と言われた。それから仕事をどんどん頼むようになり、何回か足を運ぶように」になったという。

水原は、興味深いエピソードも吐露していた。ある日、訪ねた竹細工職人のもとでタウトが出されたお茶を飲んでみると、その姿に向かって、職人の奥さんが手を合わせて拝んでいたという。それほどまでに、被差別部落の境遇にタウトが同情を寄せていたこと、そのみならず、デザイン性を向上させることを通じて実際に竹細工の付加価値を上げ、生活改善に貢献していたことを物語っている。

この点については、タウト自身も日記のなかで触れている。1935年11月中旬に予定されている丸善での小工芸品展覧会のために準備していた頃の記載で、

「ミラテスが展示するものは、ただに一軒の工場が製作したのではなく、町々や村々のそれぞれの工場やまた農民たちもその仕事を受け持っているものなのである。…もし、一般の人々がこの生産品に興味をお持ちになるならば、それは同時に多くの農家の人々や小さな仕事場の職人たちを援助されていることになるのである^{xxii}」と、工芸品の質向上に尽力する理由が、実際に製造を担っている職人たちの生活支援であることを明確に表明しているのである。国策としては輸入拡大が意図されていた一方、本論にて第1、第2の「差別の構造」として取り上げたように、タウトはいわば被差別の当事者として、「差別の構造」を十分に認識しているからこそ、生産過程の風下側へのまなざしを向けることができたのではなからうか。

この竹細工の担い手たちと被差別部落との関わりのなかに、本論で触れる3つ目の「差別の構造」を指摘したい。迫害にあつて郷を追われたタウトは、逃避先の日本にあつてもあらぬ差別を被り、国家間の論理から比較的解放された高崎の農村地帯において、別の形態の差別に接することになった。工芸品の意匠性を向上させることによって、この事態を打破していこうとするタウトの姿勢、何故、竹という素材にこだわりを強くしたのか^{xxiv}、こうしたことは、第3の「差別の構造」を理解することで合点が行く。この差別の実相に接したことで、タウトの高崎との感情の上での結びつきは強まったのではないか。被差別の当事者が、異なる差別の実態に触れ共感すること、つまり、「差別の構造」という横串を通しながらグローバルとローカル間が直接結びつく可能性を考察していくこと、こうしたことが今後も継続して必要にならう。

被差別部落の問題は顕在化しづらく、事実の継承を難しくしているが、今日、幸いなことに「西上州竹皮編でんえもん」を主宰し、タウト考案の竹皮編を実際に創作・継承している専門家がいる。前島美江氏^{xxv}である。稀少となった柔軟性のあるカシロダケ（皮白竹）を探し、独特の風合いをもつバスケットなどの工芸品制作（写真2）に尽力しておられる。かてて加えて、非常に興味深いことに、同氏の旧知の友人である映像作家・青原さとし氏が、前島氏が挑戦しているカシロダケの竹林保全プロジェクト「かぐやひめ」の活動に強い関心を持ち、2021年、映画『タケヤネの里』として記録・公開した。一連の活動によって竹細工職人たちの存在が忘れられること

なく、再びその技術や境遇、さらに誇りについて、私たちが再考する貴重な機会を提供してくれている。あくまでも文化の継承を骨格とするタウトの工芸に対する理念は、もっとも強く「差別の構造」に取り込まれていたのであろう竹工芸を介して、今日に生き生きと受け継がれている。

6: 結：高崎がタウトを庇護し続けられた要因とは

以上、昭和初期の高崎という一地方都市が「文化の涵養地」として機能し、タウトという著名な文化人を複合的な差別の課題を克服しながら確実に庇護してきたことを跡づけた。その際、タウトが直面した3つの「差別の構造」を指摘しつつ、これを器用に回避しながら、次の新天地を切り拓いていったことを指摘した。なぜ回避できたのか、とえば、a) 高崎という都市にそもそも文化人を受け入れる素地が備わっており、井上らのように実際に招聘に対応できる人的ネットワークがあったこと、b) タウトが、当初は不本意ながらも「工芸」を文化触媒としながら、高崎のつくり手たちと確たる信頼関係を築き、さらにミラテスによって、その成果が誰にでもわかりやすく伝えられたこと、が挙げられよう。

後者について少し補足すると、高崎におけるタウトのパトロンとなった井上房一郎は、タウトが逗留していた頃を回想し、「その頃の工芸といえば、帝展を中心とする名人たちの一品制作が主流をしめ、一部の金持や好事家の間でもはやされるだけで、大衆とのつながりが、たいへん弱かったものでした。」という認識を示し、「タウトのような優秀な建築家なら必ず工芸にも正しい見解をもち、日本の工芸を新しくするために最も適当な人である」と、タウトの招聘が高崎に大きな成果をもたらしたことを指摘している^{xxvi}。

これに対して、タウトの愛弟子として、常に右腕となっていた水原の回想は少し異なり、井上のような理想を語ることなく、より現実的な面に目を向けている。

「けれども井上さんを中心とした高崎の工芸の仕事はすべて発足間もないいわば建設途上のものでタウトを迎えた昭和九年八月には、どの部門も自立する力はなく、ましてそこにドイツで一流の教授の報酬を負担できるほどの経済力もない。それは井上さんが個人で負担する以外になかった。報酬どころか、試作費も捻出できなかった」とその窮状を証言している。工芸作品を販売するミラテスも、世間に好評を博したことは間違いないが、その実は、デザイン性を考慮するあまり生産コストが跳ね上がり、経営的には常に赤字続

きだったという。

水原はさらに続けて「ひどいことをいうならば、タウトの仕事をやめれば売れぬ商品の試作費も不要であり、経済的に黒字」になっただろう、と吐露している。この証言はきわめて重要で、水原はそれではなぜ事業を止めなかったのか、これを考えるとき、止めなかった要因がほかならぬ「文化継承」であって、これこそが高崎の人々が、何があっても守るべきものとしてとらえていたのではないか。

何があっても、と記したのは、タウトやタウト周辺は不気味にも常に当局の監視下に置かれていたからである。事実、水原は、太平洋戦争開戦の1941年12月8日、高崎警察特高によって聴取されたと証言している。

これに関連して印象的なのは、タウトが日本を離れる際に開催された送別会における群馬県の君島知事の挨拶である。高崎に滞在中、タウトが東北地方を旅した際には、まるでスパイ扱いをされ、警察の監視がつきまとい自由が利かなかったことを明らかにしている。知事は、タウトが訪問する先々に手配し、監視を止めるように依頼したというが、それでも酷かった、それを詫言いたいと知事が公言している。タウトを庇護するということは、同地の人々にとって、時に身の危険を案じながら文化を守る、ということの意味していたのではないか。こうした境遇にあることに、タウト自身は大いに葛藤し、日本における「美しい」文化・自然を心の拠りどころとし、さらに質の高い工芸品を生み出すことによって、自らの社会的役割を自認しようと懸命だったのはなかるうか。

それが、上に連ねてきた、差別を回避できた要因の3つ目である。c) として、自然環境と純粋な住民の温かさ、を挙げたい。

タウトは高崎近郊の無垢な丘陵地帯の風景を愛し、少林山周辺の近隣住民たちと気のおけない交流を心から喜んでた。タウトは、近隣の丘陵地帯を毎日2時間ほど散歩することを日課とし、道中の農家の人々との自然な交流を楽しんだ。お茶やお菓子がふるまわれることもあり、気のおけない和やかな時間だったという。1935年9月の碓井川の洪水災害時には、見舞金を贈り、藤塚地区全戸に「水害見舞 ブルーノ・タウト」と記したバケツがプレゼントされた逸話もよく知られている。高崎の文化的環境がタウトを引き留める磁力として作用していたのである。これらが相互に作用しながら、タウトにとっての文化都市・高崎が形成されていた。

かつて、タウトは雑誌の企画で志賀直哉と対談しているが、この記事上でなんと志賀は「タウトはユダヤ人」と発言していたことが確認できる。これはもちろん事実誤認であり、訂正すべきことながらのだが、周囲はそうに対応していない。なぜか。この一件は、それほど、そのように誤認していた人々が多かったであろうことを物語っている。タウトがユダヤ人だとして、第二次世界大戦中には、高崎のタウトの碑に小学生が石を投げつけていたほどだという。

おそらく当時の人々にとっては、タウトが、職も国も追われることになっても、純粹に思想信条を貫き果敢にナチスに反対し続けたことなど、到底想像できないことで、それゆえに自分には決して真似できないから「人種故に祖国を追われ、少林山に隠れ住むことになった。気の毒だ」と自らを納得させていたと、水原は分析している。その意味で、水原が晩年に私たちに問いかけていたことは極めて重い。「ナチスを憎み、最愛の子どもたちとも別れて、異郷にその日を送っても、正しいと信ずることのためには、悔なしとするタウトの心情を本当に理解」したか、と。

今日的に解釈すれば、これこそが、人権と民主主義の保護を前提とする私たちの市民社会の根幹を成すものである。むろん、昭和初期の言説のどこにも「人権」や「表現の自由」という文言は見当たらなかったが、高崎が身をもって示した、「差別の構造」に抗う／回避する、文化をかすがいとする新たなネットワーク形成の方法論は、今日も、そして今後も、きわめて示唆的な事例である。

-
- i 水原徳言, ブルーノ・タウト, in: 群馬の人々 第2 (近代), みやま文庫, 1963, p.104
- ii 井上房一郎の実父は、井上工業（前身は井上保三郎商店）創業者の井上保三郎。土建、電気、ガス、電灯、製粉、製糸など30以上の会社を設立し、地域産業を興し、雇用を創出することに努めた。高崎観音を建立したことも知られる。
- iii 考える芸術パトロン 巨視的な夢想家・井上房一郎, 芸術新潮 1973年1月号, pp.167-171
- iv 井上房一郎, タウトを迎えたころの私の仕事とその背景, 上州路 1975年9月号, 1975, pp.52-55
- v 国井富太郎, 工芸試験所の歩んできた道, 工芸ニュース 17号, 1949, p.6
- vi 庄子晃子, 商工省工芸指導所顧問としてのブルーノ・タウトの産業工芸のための規範原型論とその実践に関する指導についての研究, p.55.f
- vii 剣持勇, 先生、ごめんなさい ータウトの思い出ー, 図書 1962年11月号 (159), 1962, pp.33-35
- viii 藤森照信, タウトの高崎時代, パトロン井上房一郎氏に聞く, 図書 1991年4月号 (502), 1991, pp.12-17
- ix 他にも、右のような言及がある。「垣根もなければ庭戸もないーそれどころか前庭さへもついていない木造の簡素な小家屋があった」ブルーノ・タウト, 日本雑記 (タウト全集; 第2巻), 育生社弘道閣, 1943, p.5
- x タウトの日記 1934年, 岩波書店, 1975, p.385
- xi 朝雲久児臣, もうひとりのブルーノ・タウト 文明批評家論の創造的提言, 上毛新聞社, 1990 に詳しい。
- xii タウトが来日する前の井上自身の工芸活動については、当時の雑誌「建築画報」23巻6号, 1932などに詳しい。
- xiii タウトの日記 1934年, 岩波書店, 1975, p.502
- xiv タウトの日記 1935年ー1936年, 岩波書店, 1975, p.6
- xv ブルーノ・タウト, ニッポン ヨーロッパ人の眼で見た, 明治書房, 1934
- xvi 酒井道夫, ブルーノ・タウト著『ニッポン』の出版企画の変遷について, 武蔵野美術大学研究紀要, No.16, 1985, pp.83-90などに詳しい。
- xvii 国際文化振興会 編, 財団法人国際文化振興会事業報告書 昭和10年度, 1937, p.62
- xviii 浦野芳雄, ブルーノ・タウトの回想, 長崎書店, 1940, pp.41-43
- xix 水原徳言, 高崎の竹皮編とタウト, 民藝 (44), 1956, p.45 f.
- xx 部落解放同盟群馬県連合会, 全国に名をはせた高崎の雪駄 (南部表), 群馬の部落解放運動史 1923-2023, 2023, p.102 f.
- xxi 藤森照信, タウトと竹, 図書 1994年11月号 (545), 1994, p.5
- xxii タウトの日記 1935年ー1936年, 岩波書店, 1975, p.286
- xxiii この記載の内容は、1935年10月の高崎商工会議所におけるタウト自身の講演「日本に於ける私の仕事」において、直接、聴衆に語られたことである。
- xxiv 水原徳言の証言でも、竹皮編だけはタウトが居た頃よりも反って盛んになり、高崎が独特の工芸として誇り得るものになっている。当時、僅か数人の者が作ったにすぎない竹皮編が、今では四百人に余る人々の生業として成立っている、と1975年当時の様子が語られている。水原徳言, 群馬県とタウトの関係について, 上州路 1975年9月号, 1975, pp.22-39
- xxv ぐんまの手仕事, 上毛新聞社, 2014, pp.96-101
- xxvi 井上房一郎, 日本の心にふれた人 ブルーノ・タウトの思い出, 真世界 1968年2月号, 1968, pp.7-11
- xxvii 水原徳言, *ibid.*, p.22
- xxviii この点について、例えば井上は回想録のなかで、タウトの工芸指導の成果は、日本のインダストリアル・デザインを結晶化させる重要な基礎を成し、工芸界への功績は長く記憶されなければならないほどだったにもかかわらず、「建築の仕事も依頼されず、大学の教授としても迎え入れられることがなかった」点を批判的に論じている：井上房一郎, *ibid.*, 1975, p.54
また、上野伊三郎も「(タウト)が日本に残した功績が偉大であったのに対し日本は彼に何を酬いたか?…日本が彼を厚遇していたなら、彼は終生を日本に送ったに相違ない」と指摘している：上野伊三郎, 高崎におけるブルーノ・タウトおよびミラテス, 上州路 1975年9月号, 1975, p.45